



僧侶五師による声明



三浦賢翁師範による太鼓演奏

浦賢翁師範

(男鹿市・大龍寺)

が「なまはげ太鼓」

をアレンジして演奏しましたが

の半生を

の半生を「お唱えと声明と太鼓の融合」大会清興は佐藤俊晃師範監修の元、師範

師範·

詠範・

御寺院様が協力し、

道元禅

無事厳修することができました。 このように銘打っております)。

で表現しました。

中でも太鼓は、

加

前

者は少ないながらも感染対策を徹底の上、

の周年大会が開催実現できなかった為、

会場が割れんばかりの拍手に包まれ盛会裏に終えることができました。

来年度も諸行事を計画して参りますので、

今後とも師範・

詠範の会へ更なるご指導ご鞭撻賜わりますよう

奮ってご参加・ご協力をお願

45

致

い申し上げます。



清興【永平開創】

和四年九月十

应 日

梅花流秋田県奉詠大会は六十五周年記念大会というこ 一年ぶりに開催されました(正確には六十七周年です

大曲市民会館にて三

の皆さんからは久しぶりの笑顔を見せていただきました。

調子も今ひとつの中、

会等を人数が少ない

ながらもようやく行うことができました。

それでも懸命に講習会に参加してくださった

年度は、

コ

 \Box ナ禍

0

年間

のブランクを経て、

画 L

て

15

お唱えの機会が た研修会や講習



第 51 号

梅花流師範・詠範の会 会長本間雅憲 題字 初代会長・故 加藤信三師 編集者(広報部) 近藤俊彦 印刷所(資)由利印刷

梅花流師範・詠範の会事務局 倫勝寺 (能代市) 山田 卓爾 TEL 0185-58-2302



袴田俊英大会会長による 開会式挨拶



本間雅憲師範会会長による 閉会式挨拶



観客席の様子



3: 田

県奉詠大会開催りの

秋田県梅花流師範・詠範の会 副会長 伊以 道 人にん

花 流 秋 S 梅花はつづくよ どこまでも~ 田県六十五 周 年記念奉詠 大 会 報

開 催 日:令和四年九月十四日 水

▶参加人数:二二六名(僧侶・寺族 五二名、一般講員 一七四名) 開 場:大曲市民会館・大ホール(大仙市)

開会式(午後零時三十分)~開会法要

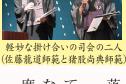
九登壇(参加講は二九講)

(佐藤俊晃師範監修、 清興【永平開創】~道元禅師の修行から永平開創へ~ 秋田県梅花流師範・詠範による梅花流詠讃歌プログラム)

閉会式(午後二時三十分) ※写真は全て曹洞宗秋田県宗務所様よりご提供いただきました

第四部





梅花と共に垂常を生きる

由利本莊市給人町·永泉寺副住職 猪の 股素 尚ら 典社

型コロナ感染症が世界中に蔓延し、 今回の奉詠大会に一つの光明を見た気がします。 満たされてしまった人々の心をどのようにすれば照らすことができるか まいりました。コロナ以後の世界にどのように対峙すればよいか、不安で ました。この期間 最初に司会の配役を仰せつかったのは二年前でした。 梅花や布教にどのように向き合えばよいか考え続けて 令和二年、三年と中止を余儀なくされ その後まもなく新

十年前、 再び司会を仰せつかって以降、 戦後の混乱期から生まれたのが梅花流です。 新しい日本を作ろうとするエネルギーから生まれた歴史は 梅花流の歴史を学び直してきました。 敗戦で傷ついた心を

> 山あります。 佐藤俊晃先生の研究でご承知の事と思います。 その時代から学ぶことは沢

告

くされています。 落ちて亡くなられています。 まさに今の時代と重なります。 多くの詞を作られた赤松月船老師は、 スペイン風邪とはインフルエンザによるパンデミックで、 さらに、 昭和四十一年には幼い次男が川に 大正八年に弟をスペイン風邪で亡

度は私たちの番です。 なるものです。 て無常に正面から対峙して素晴らしい詞を残された力強さ。コロナも無常 武勇伝が目立つ赤松老師ですが、 それを力に変えて梅花とともに新しい時代を切り開く、 その裏に秘められた深い悲しみ、



da てきる あ

ŋ

が

たさ

湯沢市駒形町·雲岩寺寺族 今ん 野の

睦る

昨秋の奉詠大会は三年ぶりの開催となりました。

久しぶりの大会とあり、

きました。 激しく力強い太鼓の演奏もあり、 でが静かに語られ、 講員さんたちも様々な思いを持っての参加だったかと思います。 ムは印象的でした。 大会中、 清興として行われた師範さん・詠範さんによる詠讃歌プログラ 暗いステージで道元禅師様の生い立ちから永平開創ま 暗転し始まる奉詠は惹きつけられるものでした。 緩急ある新しい奉詠の形を見せていただ

機会あってこそ得られたものと思います。 じました。 仲間と共にお唱えする楽しさ、 コロナ禍で自粛が続く中の開催でしたが、 外に出て、 人前でお唱えする緊張感、見えてくる課題や達成感 清興で知る新たな梅花の魅力、 奉詠大会の大切さを改めて感 全て今回

に参加しながら一層精進していきたいと感じます。 大会や講習会など梅花流に触れる場があることに感謝し、 臆せず積極的

紹介記事が県内新聞の投稿欄に掲載されました)

は数年前から地元の休耕田で蓮の花を育てており、

岩舘さん筆によるその



記 念奉詠大会に参加

鹿角市・恩徳寺梅花講員 川かわ 又表 歌を

てているのは…」と私を紹介されました。それが何度も繰り返され、 の偉大さにびっくりしながら会場に入りました。(※編集部注:川又さん な和尚様方と奥様 会場に着いた途端、 (岩館倫子さん)の会話が始まり、 恩徳寺の奥さん、 魁新聞読みましたよ」と、 「この人よ、 蓮を育 奥様 立派

どこまでも』のスローガンのもと、 詠でも一心帰命の所作がとても素晴らしく心惹かれました。 すよ」と微笑みながらお言葉を掛けていただき、 をすればいいんだと祖芳和尚様のお言葉を思い出しました。 まりました。その時、 つんと座り五年目になります。 を機に御詠歌を始めました。「隣りの人の真似をしていれば上手になりま 亡き岩舘祖芳和尚様の心に沁み入るお唱えに惹かれ、 ある方の所作に目を奪われました。続く「紫雲」奉 大会参加は二回目です。 師範の皆様による「三宝御和讃」 白房の中に紫房の私がぽ 私は六十歳の退職 『梅花はつづくよ、 そうだ、 が始

りと大らかさがあり、 だんだんと速くなりお粗末な出来でしたが、 ックス感がありました。 閉会式での奉詠は「浄心」で、私の検定課題曲でした。検定の時には、 今自分がどこに居るのか分からなくなるくらいリラ 師範の皆様のお唱えはどっし

中になるように、 感じていました。 の行事に参加させていただいた後には、 私自身の日常生活はイライラすることが多く、 今後もお稽古をがんばりたいと思います。 詠讃歌を通じて、 まずは明るい家庭、 その都度リセットされたように 月二回の梅花講練習やお そして明るい世の



梅 講 員 4

7

北 秋田 市·龍泉寺梅花講員 P 沢が 祐り

子

加しております。 に上達できず毎年一年生の私ですが、 梅花講の一員となり、 早いもので十年以上になろうとしています。 県の奉詠大会や全国大会などには参 一向

かなか練習にも参加できませんでしたが、 無事にお唱えすることができました。 今回、三年ぶりの開催ということでとても楽しみにしておりました。 皆さんの力をお借りして何とか な

きたいと願っております。 でした。「やっぱり梅花講っていいなぁ」と再確認できました。 労なさったと思いますが、とても心に残る、そして心温まる記念奉詠大会 これからも、 今大会はコロナ禍での開催ということで、 少しでも上達するように練習し、 主催者側の方々は準備にご苦 楽しんで梅花を続けてい



開会法要での奉詠





洞山良价 (とうざんりょうかい)

807~869

梅花のふるさと

5

詠讃歌の生まれた風景 へその二十 九 高祖 承陽大師道元禅師第二番御

詠 歌》

\Diamond 洞山の

は『祖堂集』という資料によるものです。ろ」であり「靴を履いてはならぬところ」 ことを踏まえてその意味を尋ねます。これに対す 者に対して てみましょう。この僧は洞山がふだんから修行 る洞山の答えは「(鳥道とは) 誰にも逢わぬとこ 洞山とある僧との鳥道に関する問答を振り返っ 録』という資料では 「鳥道を行きなさい」と指導している 「足もとに糸ひとすじも 『景t』 (こ 徳され

> すが、 て考えているようです。 いう特定の言葉で示すことのできる固定観念とし な ます)です。これはいったいどういうことでしょう。 の素足で歩み、他の何ものにも頼らぬことを言い が、禅のさとりを「鳥道」や「本来の面目」とこの僧はひと通りの修行を経てきた者のようで いようにするのだ」とあります。 どちらも自分

います。 に頼ってはならぬ」とくり返し洞山は僧に教えて ならぬ (素足に何ものもつけない)=既成の概念 かなる人の言葉にも規定されない」「靴を履いては 表せないあり方を「誰にも逢わぬ=これまでのい としていたのです。すでにある既成の考え方では 念として決まった型にはまらぬものを表現しよう こにも足跡を残さぬように、 これに対して洞山の鳥道とは、 何かの言葉や固定観 空を飛ぶ鳥がど

二十八世

洞山

一良价禪行

で洞山の真意には気づかずに終わるのですが、 間違えるのだ」と答えます。 山もたまりかねて「君、どうして(いつまでも) んか」と間の抜けた質問を重ねます。 ということは本来の面目ということではありませ しかし僧はその意図に気づかずに 結局この僧は最後ま 「鳥道を行く 洞

> にしてきた鳥道ということさえも、 鳥道を行かないことだ」 のです。 念となっているのだから、 :の最後の答えはダメ押しとも親切とも言えるも 「本来の面目(ほんとうのさとり)とは 一と。これは洞山自身が それさえも取り払った すでに既成概 \Box

ですが、洞山より後の禅僧たちがしばしば用いて 言葉「鳥道を行かない」は原文では「不行鳥道! が大切であると示しているのです。洞山の最後の 念や固定観念を注意深く払いのけてゆくことこそ がかりにしながら、 らわれた僧に対して、 きました。そして道元禅師もまたその一人でした。 この問答は、 さとりというものの固定観念にと 禅の修行においては既成の概 洞山が鳥道という表現を手

道元禅師の 鳥道

禅箴』『光明』『無情説法』『洗面』などの巻です。ば鳥道についてふれています。それは『仏性』『坐道元禅師はその著『正法眼蔵』の中で、しばし 中国宋代の宏智和尚が、洞山の鳥道の教えを踏まこのうち『坐禅箴』巻では、道元禅師が尊敬する 文章があります。 師が解説しています。 えて著した「坐禅箴」 『正法眼蔵』 たとえば「坐禅箴」に次の をとりあげ、 それを道元禅

を飛ぶ鳥のようすに託して述べています。 一禅の肝心の所を、 箴」とは急所・要点という意味です。 空間くして涯りなく、水清くして底に徹し、 清水を行く魚や、 、鳥飛んで香々たり。、魚行きて遅々たり。 涯しない空

宏智正覚

(わんししょうかく)

1091-1157

あり方をなぞるだけのものではない)」である。 界の姿と捉えてはいけないと釘を刺した上で、 よりかかるものがあってのことではない、 鳥が飛ぶ様子は、これも洞山の言うように、 の魚の行きざまは洞山の言う「不行鳥道 ついて道元禅師は、ここに言う水や空を単に自然 「香々」と言うのだ、と述べています。 (既成の それを 何か そ

な教えと言われています。 れています。 |禅は道元禅師の宗教の核心をなすものと言わ 中でもこの『坐禅箴』 巻は特に重要

こと」と述べましたが、

没蹤跡、

そして鳥道はま

「何かに心がと

ることがわかります。 にあったと考えるのは、 鳥の」一首を詠じた時、 道が道元禅師の教えの中で大きな位置を占めてい ことです。 かめてゆく余裕はありません。大事なことは次の 『坐禅箴』 以外の巻についてここで一つずつ確 の一例を見るだけでも、 だとすれば、ご自身が そこに鳥道の教えが念頭 むしろ自然なことではな 水 鳥

> 歌は「応無所住而生其心」という題がつけられてと言います。この文章の初めに、「水鳥の」の和 も残さぬこと、それを没蹤跡(あしあとを没する) 分が活動していながら、心に何のとらわれも痕跡 り方をたとえたものだと説明されてきました。 らわれることなく、自由自在に物事に応じてゆく いたと紹介しました。その意味は 禅宗の伝統では、 かと思うのです。 洞山の鳥道は

のです。 う意味を踏まえるとより明らかになるように思う れざりけり」という歌詞も、 さにここに通じるものではないでしょうか。 「水鳥の往くも帰るも跡絶えてされども道は忘 没蹤跡・鳥道とい

「水鳥の道」 の解釈

四十七世天童宏智禪師

れには少数ですが先例があります。 方がよいのではないだろうかと考えるのです。 鳥道説にもとづく「空の道」という解釈も加えた 解釈は「鳥が水上を行き来するあと」とするのが 大勢を占めていました。これに対して私は洞山の すでに挙げたように、 「水鳥の道」 の伝統的 Z な

そこではこの和歌について、 つは澤木興道師の とがある。 水鳥のゆくもかへるも跡たへ たいいうと、 ここに軌道がない。 洞山の法文に鳥道というこ 『傘松道詠講話』 て レールがない。 の解説です。 これは だ

> わち絶学無為の閑道人。 修行して忘れる。 いわゆる独自のあゆみ、 跡たえて、 道を行って忘れる。 独自の足取り、 これがたえねば

「没蹤は

の

あ

自

駄目である

います。 と述べ、 はっきりと洞山の鳥道によって解説して

ています。 水鳥という解釈も示しながら、 しふるつゆ』の解説です。 いま一つは楢崎 光気師の ここでは池の上を泳ぐ 『道元禅師の 次のようにも述べ お 歌 は

らしい様子です。 うっと消えて行く、 ものです。 があるように飛んで行くのですが、 葉がありますが、 というのです。 道が消えてしまうこと。 跡たえて」というのは、 縦横自在に歩いてゆくが、その 「歩々清風起こる」という言 歩いた跡が浄められるの 我々の修行もそうあり 鳥でもそうです。 そういうのを不染汚 跡 が ない、 実に素晴 跡がす 空に道 通っ たい た

解説は多くありません。 も知れませんが、いずれ、 道という解釈は認められます。 ここには鳥道という言葉は見えません 鳥道-まだ他にもあるか -空の道を唱える が、 空の

ことになるのではないでしょうか。 釈した方が、 それを展開した道元禅師のお考えを反映させて解 しかし以上述べてきたように、 一首の歌意をより親しく受けとめる 洞山の鳥道説と、

又責・佐藤俊晃

第51号 (6)

限られた購読寺院だけではなく より特別に許可をいただき、 多くの一般講員さん方にも読 に掲載の文章を転載させ (令和四年八・九月号より)

や雰囲気も相まって、

にやさしい空間でもあり、

かと思えるほどに荘厳で、それでいて仏さまが私たちを包み込んでくださるかのよう

「蓮華蔵世界也」と表現されるように、

まさにここが浄土世界 御授戒独特の緊張感

また同時に堂内に響きわたる御授戒御和讃は、

法悦に満ちあふれた表情はとても印象的で記憶に焼

さらに御授戒御和讃の歌詞は、私自身のこれまでの経験にも重なるところがあり、

その光景は何年たっても忘れようがありません

の戒弟の方々の達成感・充実感、

昭和四年創刊以来現在まで発行を続けている大本山總持寺本山布教月刊誌です



由利本莊市内黑瀬·惠林寺住職

ような「普通の若者」でした。

しかし、そんな私でもありがたいことに信頼しあえる仲間との出逢いがあり、

ならば私が…と素直に思えたのは、

同じ境遇にある

長男

場しのぎでなんとなくその日その日を過ごしているだけの、

いわゆるどこにでもいる

当時はいずれ

その

寺は長男が継ぐものとして、次男である私は将来のことなど大して考えもせず、

私はお寺に生まれ育ち、親に勧められるがまま大学まで進学するも、

そういった意味でも特別な感情があります。









本は 間 彦は

御授戒御和讃

- (=)聖号を称うるその声に 明の眠りの夢覚めて がなき凡夫とおろそか
- (三) ひとたび授戒の座につけ 礼拝恭敬の姿こそ
- 承け継ぎ弘めて今日よりは懇談なにいだかれ導かれ

(四)

独住第二十五世大寬眞應禅師徹玄辰三大和尚

(江川禅師) さまの「我逢人」の教えが

大本山總持寺 お唱えさせて

いただくたびに脳裏に鮮明に蘇る光景、そして多くの出逢いとともに、

私にとって思い入れの深い特別な曲のひとつです。

御授戒御和讃は、

思い出されます。

ば に 正しき慧命うちたてん 何の曇りかあるもの まこと尊き法のみち ここは蓮華蔵世界也 尊き仏の行持なる 思いすごせし愚かさよ 心の花は咲きそろう の曇りかあるものぞ



・大祖堂

した。 その友人たちの存在によるところが大きかったように思います。 影響を与えてくださった方が、 が寺を継がないと決断したとき、 左もわからぬまま言われるがまま、ただひたすらにがむしゃらに一日一日を過ごしま こうして大本山總持寺さまに上山安居することになったのですが、当然最初は右も そんな日々の中でも数えきれないほどの出逢いがあり、

修行道場とは本当にありがたい存在です。そこでの生活や出逢いは、何もできない無 駄な人間、無駄な出逢いなどないのだということを教わりました。それは当時も現在 る普通の人間でも、 もそしてこれから先も私の心の支えであり、 知だった私を知らず知らずのうちに僧侶としての道に導いてくださっていたのです。 禅師さまが信条とされていた「我逢人」のお言葉からは、 他ならぬ江川禅師さまの存在です。 出逢いによって人生は変わる、必要とされる場面が必ずある、 人生訓でもあり、僧侶としての原点です。 私のようなどこにでも 無

後に室侍寮へ随喜をさせていただくきっかけをくださ

特に私にとって最も大きな

がなければ、宗門行事や梅花流についても深く理解できないままに多くの時間を無駄 に過ごしてしまっていたことでしょう。それどころか人間としても未熟なままであっ たに違いありません。 これまでの数々の尊い出逢いがあったからこそ今の私があります。これらの出逢い

今後も一人の僧侶として、 尊い導きの法灯を承け継ぎ弘めていけるようつとめてまいりたいと思います。 また梅花流師範として、 常に 「我逢人」 の教えを心に抱き

室侍とは禅師さまのおそばに仕えてお手伝いなどをさせていただくお役目で、 まのお姿や法要の様子を誰よりも近くで拝見し、 私は大本山總持寺さまの二期法要で室侍寮に随喜をさせていただいておりました。 随喜できるのは室侍寮最大の特権と 禅師さ

の証であるお血脈を戒師さまより戒弟お一人お一人に手渡される儀式があり、 御授戒会法要の最終日前夜に修行される正授道場では 「授脈」 という仏弟子として その時

ットぶじょほ

第23期梅花流師範養成所レポート

方に貴重な感想を寄せていただきました。 ◆開設期間・令和元年六月十日~令和三年二月十日(コロナの影響により丸

一年延期

催形態も大幅に変更を余儀なくされたようです。今回、第二十三期養成所を無事終了したおこ 全国から集まった仲間と朝から晩まで梅花漬けの日々…のはずが、コロナ禍により養成所の開 梅花に取り組む若手師範を育成しています。本来であれば四泊五日の講習を二年間で六回重ね、

東京都港区芝にある曹洞宗宗務庁では、二年毎に梅花流師範養成所を設置し、熱意をもって

師範養成所を終えて 一十三期梅花流



うら 史道

今となっては聞くすべはありません。 たのではないでしょうか。亡くなってしまった 梅花流詠讃歌を通し学びを深めるのが狙いだっ お寺の生まれでなく、仏教の知識の少ない私に (前住職・三浦昌彦老師) からのすすめでした。 私が梅花流詠讃歌を始めたきっかけは、

少しでも協力できたらと思います。

よう、そして秋田県の梅花流詠讃歌発展の為に

そんな想いに触れ、私もこれから関わる方々

お唱えを通し一人でも笑顔が増える

とは、 した。 ナウイルスの影響で、二年間のうち一年が全てオ ことでした。私たち二十三期養成所は新型コロ の想いを抱いて一生懸命に挑戦しているという 催の梅花流師範養成所を受講することになりま ンライン講習という形になってしまいました。 つの教場で互いに学び合った仲間達とは、 そんな私が、この度御縁をいただき宗務庁主 全国各地から集まる受講者皆がそれぞれ 大変な講義でしたが、養成所で感じたこ 最後は

> 今も各々の か叶いませ しの交流し モニター越 んでしたが

います。 ことだと思 張っている 目標の為頑

に対して、



自主練に励んでいます!」

「日々、

梅花の力を信じて 山本郡三種町鹿渡。 邊な

だきました。 第二十三期梅花流師範養成所に行かせていた

> 習では物足りなさを感じるほどでした。 り苦労することもなく、特に後半のリモート講 教区梅花勉強会、宗務所養成所など秋田県内の 同教区の玉鳳院・柳川一童師範に誘われ、初歩道を歩みだしたのは秋田に帰ってすぐのこと。 梅花の旋律に親しんでいたものの、 成所の講習では、 素晴らしい先生方のご指導のおかげで、 をご指導いただいたことが始まりです。 幼少より本堂から漏れ聞こえる祖母の教える 新鮮な発見がありつつもあま 私が梅花 その後、 本庁養

て涙が出ました。 年の唱え込みを感じるお唱えに祖母の面影を見 した。心なしか皆の声が細くなりましたが、長 指導している当山梅花講とともにお唱えをしま 先日、祖母の三回忌法要にあたり、 今や私が

ます。 の世界に足を踏み入れて本当に良かったと思 えしていて、施主さんが感激してくれると、こ 最近では法事や葬式の度、 必ず御詠歌をお唱



講習の様子 「講員さんたちと、和気あいあいと講習しています。」

追

悼

細さ

谷*

裕

旧昌老

師

遷

化

住職・

細谷裕昌老師がご遷化なされました。

平成元年十二月に二級師範補任。

平成四

享年

令和

四年二

月

+

五

貝

能代市二ツ井

前 ·

善徳寺

七十七。

~十六年までの十二年間は、

梅花流特派師範とし

梅花流の普及

曹洞宗秋田県宗務所

QRコード

スマートフォン等で読み取 ると、『同行』過去号から 最新号まで閲覧できます。





十月

七日

(和)

讃)

二十三日

三十日

十九日日

磨然大祖入寂(和讚)(和禮)(和禮)

(和讚)

二十八日

十四

日

妙追道同 行 ()

細 ユ 谷 裕 昌老 師 の 同 行_

ーモアたっぷりな特派巡回報告が 過去記事に関しては、 掲 ,載さ

◆八月

五

二十九日 二十二日

た第十号をどうぞご参照ください

ハセミ) 七六七六

弘一正伝師範によるお唱えとなります。 プが更新されます

0 柴田

年

五月 十三日 六日

> のところ梅花講習の前にボイストレーニング ご指導いただいている『瑠璃の会』では、

2

を取り入れております。

指導して下さるの

二十日 梅梅梅菩花花花提 太 祖)

十七日 (高祖二) (太祖

発展に大変ご尽力されました。 て全国で詠唱指導にご活躍され、

ここに謹んで哀悼の意を表します。

梅花 太 祖

六月

一十四日 十七日 十日 三日 慈念 地蔵菩 聖号

日日 溪声 (永平一) 御授戒(和讚)

七月

溪 渓声声 溪声 (永平二) (總持一) (總持二)

十五

日

平和祈念 迎火盆 会

十二日

(和讚)

一十六日

十九日

九月

二日

〒010-0111 秋田市金足岩瀬字前山3 東泉寺 TEL018-873-2675

北秋田市の龍泉寺御住職・佐藤俊晃師範 梅花インフォメーション 瑠璃の会「ボイトレ」レポー

チャーを交えながらリズミカルに母音の発声 まります。そして、口をしっかり開きジェス 声を出す前にまずは全身をほぐす体操から始 大館市の仙台なな先生。 なな先生曰く「身体は楽器」ということで

ちもほぐれ、 ングマン』の時は踊りながら… (笑) 歌います。『もみじ』や『いい日旅立ち』、 しょうか? とができていると、俊晃先生お墨付きです。 をした後、その日の課題曲をパート分けして イストレーニングをなさってみてはいかがで 皆様も各梅花講の練習前に、 御詠歌の講習前にこれを行うと、喉も気持 いつもよりラクに高音を出すこ 軽い体操やボ 香央里)



